

## 2 海外現地調査報告

### 海外調査（モロッコ、スペイン）報告書

関 哲 行

#### 1. モロッコ

2008年12月26日、11時55分発の全日空機で成田を出発し、パリ経由でカサブランカのムハンマド5世空港に到着した。カサブランカに着いたのは夜中の11時半であり、グラン・タクシーでラバト市内のホテルに向かった。ラバト市内のホテルに着いたのは、夜中の2時半頃である。

12月27日、ラバトのムハンマド5世大学と図書館を見学した後、グラン・タクシーで隣町のサレのユダヤ人街を訪れた。海港都市サレのユダヤ人街は城壁に囲まれた港近くにあり、現在はムスリム居住区となっているものの、奥まった袋小路のような狭い街路に、往時の雰囲気を感じ取ることができた。

12月28日、ラバトから列車でモロッコの古都メクネスに入った。駅近くのホテルに荷物を置き、30分ほど歩いてメクネスの中心部（旧市街）に足を踏み入れた。城壁で囲まれた旧市街で道に迷っていると、モロッコ人が近づいてきて道案内を申し出てくれたが、案の定、無料ではなかった。メクネス旧市街ではムーレイ・イスマイル廟やマンスール門を訪れた後、旧ユダヤ人街も覗いてみた。城壁近くの広場では、メクネス市民がサッカーに興じており、国際的的身体言語としてのサッカーの重要性を再認識した。

12月29日、メクネスから列車でフェズに移動し、ジェバラ門近くの瀟洒なホテルに宿をとった。値段の割に興味のあるホテルで、中庭やアラベスクは何ともエキゾチックである。フェズではスペイン語のできるガイドを雇い、旧ユダヤ人街とシナゴーク、スペインを追放されたムスリム居住区であるアンダルス人地区、9世紀に造営された北アフリカ最大のカラウイン・モスク、フェズの守護聖人たるイドーリス2世を祀ったムーレイ・イドーリス廟などを訪れた。旧市街の狭い街路には、多くの店舗や工房が建ち並び、一部は袋小路のようになり、ガイドなしに初心者が歩き通せる町ではない。半日だけの散策であったが、前近代のマグリブ都市を彷彿とさせる雰囲気を備えていた。

12月30日、フェズから長距離バスで5時間ほどかけて、地中海岸のテトゥアンに向かった。テトゥアンは20世紀前半のスペイン保護領モロッコの首都で、スペイン植民地時代の風情を色濃く残した都市である。スペイン語を話すモロッコ人も多く、資料収集のため訪れたテトゥアン考古学博物館、テトゥアン総合資料博物館では、関係者からスペイン語で説明を受けることができた。テトゥアンは15世紀末にグラナダを追われたムスリムが再建した都市であり、追放ユダヤ人を受け入れたのみならず、16世紀のスペイン南部地域への反攻拠点となった海港都市でもある。

フェズからテトゥアンまでは、リーフ山脈越えの単調な旅であったが、ベルベル人の居住するリーフ山中の諸都市、とりわけ山中に「天空都市」のように屹立する小都市シャウエンを見ることができたのは幸運であった。シャウエンはグラナダを追われたムスリムが、シエラ・ネバダ山中のグラナダを追憶して建設した小都市であり、レコンキスタ運動の敗者を象徴する秘境都市である。8世紀初めから15世紀末まで、800年近くにわたりグラナダに居住したムスリムにとって、故郷はマグリブではなくグラナダであった。レコンキスタ運動により住み慣れた故郷を追われたムスリムが、リーフ山脈をシエラ・ネバダ山脈に見立て、リーフ山中に「第二のグラナダ」を再建したのは、当然の所作であったろう。中世のマグリブ諸都市とスペイン南部のアンダルシア諸都市がヒト、モノ、情報の移動の点で一衣帯水であることを実感した海外調査であった。

19世紀末の米西戦争に敗れ、キューバやフィリピンといった最後の主要植民地を失ったスペインは、ジブラルタル対岸のモロッコ北部での勢力圏拡大に努めた。第一次世界大戦終了後に余剰となった戦車や飛行機などの近代兵器を投入し、リーフ戦争で在地のベルベル人抵抗勢力を撃破した。こうしてスペイン保護領モロッコが成立するのであるが、起伏が多く地平線のかなたまで続く広大なリーフ山中で、スペイン軍はいかにしてベルベル人抵抗勢力と制圧できたのか考えさせられた。

12月31日、長距離バスでテトゥアンからカサブランカに向かった。当初、テトゥアンに二泊する予定であったが、元旦のバスの便がなく、やむなく大晦日に移動することにした。大晦日の上に、交通事故に遭遇し、高速道路は渋滞の連続であった。そのため高速道路上で勝手にトイレ休憩するモロッコ人乗客も出現し、少々驚いた。カサブランカのホテルに着いたのは、夜の9時半を過ぎていた。大晦日のため、ホテルのレストランは大

音響のディスクに変貌しており、長旅の疲れによる体調不良と騒音で熟睡できなかった。

2009年の1月1日、カサブランカ市内のハッサン2世モスクを訪れた。ハッサン2世モスクは、海岸沿いに建つモロッコ最大のモスクで、ミナレットの高さは世界一といわれる。暖かな元旦で、モスクから見える海も穏やかであり、瀬戸内海を想起させる光景であった。

1月2日、ムハンマド5世空港からイベリア航空機で、マドリードに移動した。イベリア航空では一部のパイロットがストライキを行っており、3時間遅れでマドリードのバラハス空港に到着した。着陸にあたり乗客が拍手していたのは、3時間遅れでも飛んでくれたことへの感謝の気持ちからであろう。しかし3時間も遅れると、乗り継ぎに間に合わない乗客が出てくるのはやむをえない。

## 2. スペイン

イベリア航空機はバラハス空港のターミナル4Sに到着した。乗客はこのターミナルからターミナル4へ地下鉄で移動し、そこで荷物を受け取ることになっているが、他の空港とはやり方が異なり、面食らった。空港からタクシーでホテルに向かい、夜の9時半にホテルに到着した。近代化したマドリードの町並みを眺めながら、久しぶりにワインを傾けた。モロッコではアルコールを自制していたので、格別の味であった。

1月3日、マドリードの南駅から長距離バスで3時間ほどかけ、スペイン中西部エストレマドゥーラ地方の聖地グアダルーペへ向かった。グアダルーペは後述するサンティアゴ・デ・コンポステーラ(以下サンティアゴと略記)やモンセラートと並ぶ、中世スペインを代表する聖地のひとつであり、巡礼や聖人崇敬に関心をもつ者として、一度は訪れておくべき聖地である。バスがグアダルーペに近づくにつれ、車窓の眺めは赤茶けたメセタ(中央台地)から険しい山がちの景観へと一変し、霧に咽ぶ狭い山道が最前列に座る私の眼前に迫ってきた。正月のせいだろうか、途中から乗客は私一人になり、万が一、夜中にこんなところでバスが故障したり横転したらどうなるのかと、心細い思いにかられた。

グアダルーペでは、スペイン人と結婚した日本人女性のいる小さなホテルに泊まった。早速、荷物を置いてグアダルーペ修道院に向かったが、とにかく寒い一日であった。グアダルーペ修道院は、14世紀に聖母マリアが貧しい牛飼いの前に顕現し、聖ルカの彫った黒いマリア像を予告したことに由来する修道院である。この黒いマリア像は教皇グレゴリウス1世がセビーリャ大司教に恵与したもので、8世紀のムスリム侵入時に、異教徒の手から守るため、セビーリャからこの地に運ばれ、グアダルーペ山中に秘匿された。グアダルーペ修道院は、この再発見された黒いマリア像を安置するために、14世紀半ばに建造された修道院である。黒いマリアは病氣治癒や危難回避に効験があるとされ、中世末期以降、カトリック両王やコロンブスなどが参詣したのみならず、多くの巡礼者を集めた。メキシコとペルーを征服したコルテス、ピサロがエストレマドゥーラ地方の出身であったことから、黒いマリア崇敬はアメリカ植民地にも移植された。メキシコの聖地グアダルーペは、これを代表するものである。

女性ガイドの案内でグアダルーペ修道院の内部を見て回ったが、想像していた以上にすばらしい修道院であった。修道院の内部には、近隣都市バダホス出身の画家スルバランの絵やザビエルの像もあり、再建された回廊も見事なつくりであった。女性ガイドによれば、グアダルーペ修道院は当初ヒエロニムス会に属していたものが、19世紀の教会・修道院財産解放令で廃院となり、現在はフランシスコ会に属している。コンベルソ(改宗ユダヤ人)修道士が異端審問裁判で有罪となり、グアダルーペ修道院が「血の純潔規約」の導入を余儀なくされるのは、ヒエロニムス会時代の15世紀末のことであった。

グアダルーペ修道院の前には、15世紀の「洗礼者ヨハネ施療院」を改造したパラドール(国営ホテル)が建っている。この施療院は医学校のみならず、子供たちの宗教教育のための初等学校も併設していたことで知られる。施療院のパラドールへの転換は、聖地サンティアゴでも確認できる。

バスの時刻表によれば、1月4日には17時20分発のカセレス行きのバスがあるはずだ。そのバスでコルテスの生地トルヒーリョと「化石された中世都市」カセレスを訪ねる予定であったが、待てど暮らせどバスが姿をあらわさず、ついに断念せざるをえなかった。1月4日は日曜日の上に冬休みと重なり、学生を中心とする乗客が見込めないため、運行中止になったようである。寒空の吹きすさぶ中、長時間バスを待っていたせいか、熱はないものの、喉が痛み、風邪を引いた。この日はグアダルーペに延泊した。私のような外国人旅行者にとって、こうした時刻表の変更は迷惑この上ない。

1月5日、朝9時頃のバスでマドリードに戻り、ホテルに入った。ホテルのテレビでイベリア航空のパイロットによるストライキが報じられており、翌日のサンティアゴ便が懸念されたので、確認のため地下鉄でバラハス空港に出向いた。ターミナル4では案の定、乗客が列をなしており、明日のサンティアゴ行きが思いやられる。

1月6日、早めにホテルを出て、地下鉄でバラハス空港に向かった。朝早かったためか、さしたる混乱もなく搭乗することができ、定刻どおりに出発し、小一時間でサンティアゴ空港に着陸した。市内に入ると、フィニステラ行きのバスにぎりぎり間に合ったので、荷物を抱えたまま飛び乗った。大西洋に突き出た「最果ての地」フィニステラは、青森の恐山を思わせる地にあり、サンティアゴ巡礼者の多くが海のかなたの来世への思いをはせながら、足を運んだ。サンティアゴ市内からフィニステラまで、バスですら3時間ほどかかり、中世の徒歩巡礼者にとって「苦難の長旅」の末尾を飾るに相応しい旅程であったろう。

昼過ぎにフィニステラに着いたので、早速、海辺のレストランに入り、地元の海鮮料理(プルボ・ガリエーゴと帆立貝)とガリシア特産の貝——白ワイン(リアス・バイシャス)を注文した。もちろん帆立サンティアゴ巡礼者のシンボルである——は記念に持ち帰った。食後、海辺を散策し、「最果ての地」の雰囲気を感じた。それにしてもこの日は、寒い一日であった。体調も思わしくなく、15時のバスで帰るつもりであったが、またしてもバスが来ない。地元のスペイン人に聞いて、この日が「東方の三博士」の祭日であることに気づいた。祭日には、15時の便はないのだ。時刻表にも小さな文字で書いてあり、気づかなかった私のミスである。寒風の中を2時間ほど待ってバスに乗り込み、サンティアゴ市内のホテルに着いたときには、とっぴりと日が暮れていた。

予約していたホテルは、念願のパラドール・デ・ロス・レージェス・カトリコス(カトリック両王パラドール)である。このパラドールはスペインを代表するパラドールのひとつで、16世紀初頭にカトリック両王が建設した巡礼者のための施療院を改造したものである。サンティアゴ教会西門(栄光の門)の前に建つ、重厚なファサードの建物で、歴史の重みを随所に感じさせる。カトリック両王パラドールが、サンティアゴ教会をはじめとするオブラドイロ広場近辺の歴史的建造物と共に、世界遺産の一部に組み込まれていることはいうまでもない。

パラドールの内部も、歴史を感じさせる趣のあるもので、中庭もすばらしいものであった。しかし咳は止まらず、微熱があり、腰や頭も少し痛む。これがスペインではやっていたインフルエンザの特徴らしい。宿泊料金は安くはなかったが、1月6日は私の誕生日でもあり、サンティアゴ巡礼を研究対象としている者の一人として、ぜひとも宿泊したいと願っていたパラドールである。

1月7日はさらに寒い一日であった。この日はまずサンティアゴ教会西門から入り、主祭壇の前で祈った後、聖ヤコブの遺骸を収めた主祭壇下の地下納骨堂、主祭壇裏の聖ヤコブ像などを見て回った。次いでサンティアゴ教会付属博物館を見学し、銀細工職門、黒玉細工職門、アンテアルターレス修道院、サン・マルティン・ピナリオ修道院などを訪れた。巡礼者は西門から入り、主祭壇の前で祈った後、一度、教会の外に出、黒玉細工門から銀細工門へ抜ける巡拝コースをとるのが通例であったが、私もそれに従って巡拝した。教会平面図をみただけでは分からなかったが、西門から黒玉細工門までは歩いて1-2分で、意外と容易であることを実感した。体調も優れないことから、この日は早めにホテルに帰り、ベッドに入った。

1月8日、強い大型寒気団が南下しており、スペインを含むヨーロッパ全域が雪に見舞われた。雪に弱いイベリア航空機が、定刻どおりに離発着できるかどうか不安だったので、早めに朝食を済ませ、サンティアゴ空港に向かった。相変わらず体調は優れなかったが、聖ヤコブの恩寵だろうか、イベリア航空機は定刻どおりに離陸できた。

1月9日、12時半のルフトハンザ機に搭乗し、フランクフルトで全日空機に乗り換えて、10日の夕方4時に成田着の予定であった。しかし散々な一日であった。通関手続きを済ませ、搭乗ゲート前で待っていたが、雪のため出発時間と出発ゲートが何度も変更になったうえ、結局飛び立せず、グアダラハラ市内のホテルに宿泊する羽目に。マドリード市内のホテルは、雪とパイロットのストライキで満室らしく、確保できなかったようだ。それにしても、こうした時のスペイン人職員の対応は、日本とは全く違う。発着案内板に運行中止の掲示は出ず、地上職員が歩いて叫んでいた。通関手続きをした後だったので、トランクを受け戻す必要があり、出国ゲートに行くと、小一時間待たされた挙句、私のトランクは指定された場所ではないところに、投げ捨てられていた。トランクを受けた後、4時間ほどかけて二度も長い行列に並ばされ、やっとのことで翌日の搭乗券をゲットした。それからがまた大変だった。雪のふる寒空の中を何時間も、グアダラハラ市内行きのシャトルバスを待たされ、ホテルに着いたのは夜中の1時頃であった。体の芯まで冷え込み、咳がひどくて、寝入ったのは朝方であった。

1月10日、あたり一面銀世界であった。テレビのニュース番組は、バラハス空港が雪で大混乱と報じていた。数日前から大雪警報が発動されながら、バラハス空港もマドリード都市当局も、十分な除雪対策を講じず、その怠慢が大混乱の原因であるとテレビは報じていた。いかにもスペインらしいと感じたのは、私だけではなかったであろう。グアダラハラ市内のホテルを9時頃に出発、何とかバラハス空港に到着し、通関手続きを済ませ

て安堵したのも束の間。例によって何のアナウンスもないまま、搭乗ゲートが変更され、搭乗客は度々「民族移動」を余儀なくされた。その間、空港内のレストランで食事をとろうとしたところ、搭乗客でごった返していたためか、客が自分の手で前の客の皿を片付け、テーブルを拭いていた。日本ではよほどのことがない限り、ありえない光景である。

1時間半遅れたものの、やっとのことでルフトハンザ機に乗り込むことができた。フランクフルトでの乗り継ぎ時間が気になったが、到着するとドイツ人職員が迎えにきてくれて、全日空のカウンターまで案内してくれた。搭乗手続きを済ませ、全日空機に乗り込むと、日本人の客室乗務員から喉飴を頂戴した。微熱が続き、咳き込んでいた私にとっては、何よりのプレゼントであった。日本の接客サービスは世界一であると改めて痛感した瞬間である。1月11日の夕方成田に到着し、16日ぶりに自宅へ帰った。予期せぬ事態にも直面したが、収穫の多い海外調査であった。